あすかでらせいほういせき
飛鳥寺西方遺跡

はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺旧境内の西側に広がる遺跡です。『日本書紀』によると、飛鳥寺西の槻樹の下は大きく歴史が動いた場所といわれています。壬申の乱（672 年）では軍営が置かれたほか、蝦夷や隼人などの辺境に住む人々を招いて饗宴も行われました。大化の改新（645 年）以前では、中大兄皇子と中臣鎌足が出会ったのもこの飛鳥寺西であったといわれています。このような記述から、飛鳥寺の西方には飛鳥時代の歴史の舞台となった“槻樹の広場”があったと考えられています。

この調査は、飛鳥寺西方遺跡の規模や構造を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。飛鳥寺西方遺跡の発掘は今回の調査で９年目になります。今回の調査位置は、飛鳥寺西門跡から南西に約 120mの位置にあたります。今回の調査地の東側でおこなった平成 23 年度調査では、石組溝２条、石列、木樋暗渠、砂利敷が確認されています。今回は、調査区を東西 47.5m、南北 10m に設定し、調査を実施しました。

主な検出遺構と出土遺物

今回の調査では、石組溝２条、石列の一部、柱穴跡を検出しました。

石組溝１は調査区東側で検出しました。南北方向に延び、幅 1.15m、深さ約 40 ㎝を測ります。溝の側石は２段積で、底石はありません。溝内には砂礫が堆積しており、水路として利用されていたようです。石組溝２は調査区の南側で検出しました。東西方向に延びる溝で、側石はすべて抜き取られ底石のみ確認できました。幅は 85 ㎝を測ります。石組溝２の東延長部分を平成 23 年度調査区でも確認しており、東西に長さ約 75mにわたって延びることがわかりました。石組溝２の西端はそのまま延長せず、北側に向けて折れ曲がっているようにみえます。このほか、石組溝２の北側で並行する石列も確認できました。遺構の重複関係からみて、石組溝１を埋め立てた後に石組溝２と石列が造られていることがわかりました。

調査区の中央付近では柱穴跡を確認しました。抜き取り穴には黄色の山土が充填されています。この柱抜き取り穴の平面配置は東西３間、南北２間以上となり、建物跡であったと考えられます。

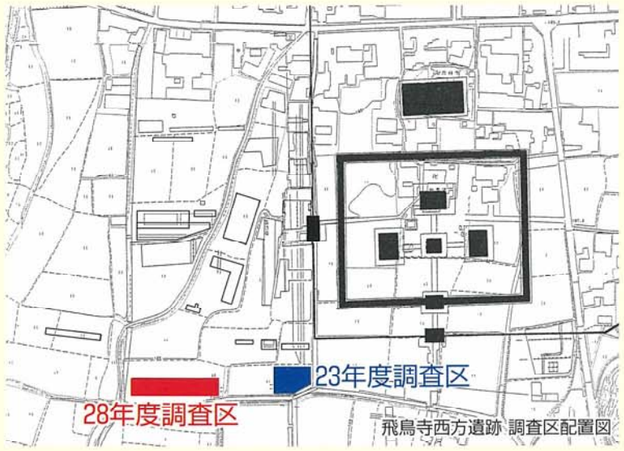
調査区から土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦などが出土しました。飛鳥時代以降の遺物が多く、奈良時代から平安時代にかけても活発に土地利用がなされていたようです。そのときに飛鳥時代の遺構が壊され、調査区のいたるところに石が散乱した状況をみてとることができます。

まとめ

今回の調査では飛鳥時代の石組溝、石列、建物跡を確認することができました。これらの遺構には前後関係があり、飛鳥時代の遺構にも変遷があることがわかってきました。そして、飛鳥時代後半には砂利敷広場として調査地周辺まで広がっていたと考えられます。また、飛鳥寺西方遺跡では３棟目となる建物跡も確認されました。砂利敷空間と考えられてきた飛鳥寺西の広場にも建物が複数棟建っていた可能性があります。飛鳥寺西方遺跡の調査も終盤を迎え、飛鳥寺西の広場の様相が少しずつ明らかになってきました。

飛鳥寺西方遺跡

２０１７年２月
明日香村教育委員会



飛鳥寺西方遺跡 調査区配置図

23年度調査区（南西から）

23年度 東西石組溝と石列

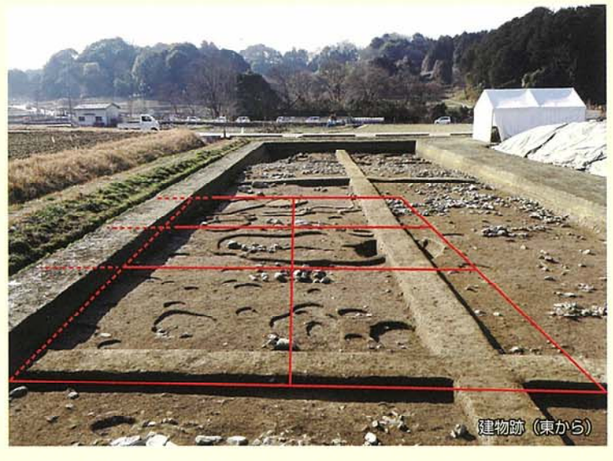
28年度調査区（南西から）

調査区合成図（上が北）

28年度調査区（東から）

石組溝1（北から）

石組溝2と石列（西から）


建物跡（東から）